若者の農村居住条件の指標リスト化とそれを用いたアンケートによる福島大学学生の意識構造解析

原田　茂樹[1]

[1]正会員　福島大学　教授　食農学類　生産環境学コース（〒960-1296 福島市金谷川 1 番地）

E-mail:harada.shigeki@agi.fukushima-u.ac.jp

農業における最大の課題である後継者問題の解決と福島県浜通りの避難指示解除区域の復旧・復興のためには，若者の農村居住選好の明確化が必須である．飯舘村を対象地とした福島大学協働プロジェクトの参加者が抽出した若者の農村居住条件を表す19の指標を用い，福島県出身者が4割を占める福島大学生222人にアンケートを行った．各指標の重要度（5件法）の平均値と，因子抽出結果を集団ごとに比較し，若者の農業に対する考え方や居住選好を形成する要因を解析した．「農村居住の場合も利便性は重要である」が「農村・農業の多面的機能を評価」する若者の意識構造，「農業＝栽培」「農村居住＝農業従事」と限定しない若者の意識が示された． 多面的機能の評価をより明確にとらえる指標開発・他地域学生へのアンケート調査が今後の課題である．

***Key Words** : index list for the youth to realize farm village residence, factor analysesc, subjective importance of each index, quesionnare, Iitate-mura*

1. 緒言

(1) 研究の背景と目的

農村地域における最大の課題は人口減少問題・後継者問題である．これまでに都市農村交流の観点からこの問題に取り組んだ研究例がある．また地域の持続性の観点や環境活動の観点からこの問題に取組んだ研究例もみられる．

福島県浜通りのうち飯舘村で，避難指示解除後の帰還のペースが鈍く特に若者の場合に顕著であることに注目すると，著者がすでに行っている被災地への訪問の条件に関する解析に加え，若者の農村居住に関する意識構造解析が重要であるといえる．それらの詳細は，被災地の避難指示解除後の帰還状況・飯舘村での農の再生へ活動の状況とあわせ既報[1]を参照されたい．

これまで著者は，集団としての「若者」の特異性を示す既報を発表している．被災地である宮城県丸森町の住民意識調査解析結果では，農村（中山間地農業地域[2]）における若者は他の住民（一般住民，および市職員）とは6カテゴリー42項目の居住環境に対する満足度と重要度の判定が大きく異なることを示している[3]．また「住みたい町の条件に対する因子分析」結果では，仙台市周辺に居住する学生を中心とした若者の集団（平均年齢21歳）と仙台市内の環境系NPO集団（平均年齢50歳）では因子構造が異なり，若者は利便性を特に重視していることを示している[3]．

そこで，本研究では，福島大学の学生がブレーンストーミングにより作成した「19の『若者が農村に住む条件』リスト[4]」を用い，webアンケート（5件法）を通じて各指標の重要性を評価し，特に若者の農業，農業就業，農村居住についての考え方・心理構造を因子分析（SPSS Statistics v.25）[3]によって解析した．ブレーンストーミングは，福島大学2022年度後期セミスターの「全学協働プロジェクト（全学の11名が参加）」において，現地学習，現地フィールドワーク，情報共有，指標理論学習を経て行ったものである．構成概念を構成する要素の抽出と指標リスト化は，単一の具体的な解を得ることは難しい構成概念に対して「若者はどのような農村ならば居住したいか」という複数項目の重要性を若者の集団に尋ね共通性を見出す効果があると考えた．

(2) 本研究のアプローチ

本研究で用いる「居住」という言葉は，「定住」という概念に限定してはいない．Dual Lifeや関係人口[5]として

の居住を含めて考えている．また被験者の元々の属性の違いに社会・経済条件の影響の違いが加わり集団を構成する個々の意識や主観の異質性・多様性が大きくなった場合には，上述した構成概念に対する明確な解は得られにくいと考え，本研究では，被験者集団構成者を4割が福島県内出身者である福島大学学生に限定した．そして，「飯舘村に対する認知の度合いの違い」，「ジェンダーの違い」により被験者集団を分割した場合を加え，5つの集団ごとの指標の重要度平均値や因子分析結果の違いについて考察した．

2. 材料と方法

(1) アンケート回答者属性

webアンケートは2021年度後期～2022年度後期の福島大学の13の講義の履修者に対し，Google FormのQRコードあるいはURLを示した依頼状を配布することにより行い，222人分の回答を得た．福島大学の5学類全て，1-4学年生全てから回答が得られた．選択した講義の関係で食農学類（71人），また1年生（120人）が多くなった．女性と男性からは同等数の回答が得られた．出身地については回答必須項目としなかったが，183人から回答が得られた．130人が東北6県出身であり，そのうち95人が福島県出身者であった．

(2) アンケート実施方法と質問内容

一枚紙に，対象講義名を明記した上で，アンケートの実施者，アンケートに対する協力の依頼，および本アンケートは個人情報の取得が目的ではなく，回答者が特定されないしくみをとっていることを記載した．また想定回答時間が10-15分程度であることを示した．アンケートはスマホで回答することを想定し，「概要」，「飯舘村クイズ（4問，被験者のうち飯舘村の認知度が高い集団とそうでない集団をわけるため）」，「農村居住選好についての回答部」，「属性部」に分割した上で，それぞれを複数部に分割し，各分割の文章量が多くなりすぎないように工夫した上で，必要のない部分はスキップできるようにした．概要の第一分割は前文であり，依頼文とほぼ同じ内容を繰り返した．第二分割では，「アンケートの目的などを詳しく知りたい方はお読み下さい」として，協働プロジェクトの目的，活動内容，アンケートの作成方法，言葉の説明などを行った．

農村居住選好に対する回答部では19の指標（**表-1**）の重要度を5件法で尋ねた（**表-1**では農業に関係が深いもの3つにアンダーラインをした）．19の指標リストは，福島大学協働プロジェクト参加者11人を2班に分け，現地フィールドワークの前と後に「若者が農村にすむための条件」と題したブレーンストーミングを班ごとに行い，

表-1 農村居住の条件を表す19の指標リスト

1.	若い人（10代，20代）がいる
2.	移住した時の補助金が出る
3.	住民同士が親密である
4.	**農業の仕事に就ける**
5.	**趣味としての農業ができる**
6.	**農業以外の仕事ができる**
7.	インターネットが整備されている
8.	徒歩圏内に商店がある
9.	集まれる場所や機会がある
10.	都市部へのアクセスが良い
11.	地域の特色を活かした教育がある
12.	友達と遊ぶ場所がある
13.	子育てしやすい
14.	住民の活気にみちている
15.	自然環境が豊かである
16.	地域活性化と自分がつながりやすい
17.	安心して暮らせる
18.	居住している誇りをもてる
19.	環境負荷を減らす意識が高い

情報のカード・マッピングにより抽出・総合化した．現地フィールドワーク（2021年11月中旬）では，事前学習・ブレーンストーミングを行った上で，飯舘村役場産業振興課が実施したきた「農の再生の取組み」（若者の飯舘村コミュニティーへの参画，村外からの新規参入者と営農のマッチング，農業指導の実績，等）についての説明とディスカッション，合同会社MARBLiNGが展開中の飯舘村での若者の活動場（図図倉庫ZUTTOSOKO[9]）構築活動などについての情報取得を，村内各所の見学とともに行った．事後ブレーンストーミングでは2つの班とも事前に作成した指標リストから変化が示された．なお，コロナ禍のため頻繁な集まりが難しく，工夫をとりいれてブレーンストーミングを実施した．注意した点として，1つの指標が様々な性質を持ちうることがあった．たとえば，『必要なもの』は，施設であったり，制度であったり，意識や考え方であったり，『性格の違うカテゴリー』に属しうる場合があった．対策として，「住みたい町の条件」調査時にも行った方法として，アンケート設問中では**表-1**に示す各指標には括弧書きを補足し具体的内容を書き込むことで指標の示すもののイメージをつかみやすくした[3]．19の指標の重要度（大変重要だと思う，重要だと思う，いずれでもない，あまり重要でない，全く重要でない）には，順に5，4，3，2，1点のスコアを与えた．

上述した集団ごとに19の指標の重要度平均値の比較を，特に農業に関係が深い3項目の順位に注目して行った．その後集団ごとに因子分析を主因子法（IBM SPSS Statistics v.25）により行い[3]，農業に関係が深い項目と他の項目の共通性に注目した解析を行った．

3. 結果と考察

(1) 各指標の重要度平均値の比較

各指標の重要度平均値の集団ごとの比較を農業に関する指標（4，5，6）に注目し行う．全回答者（222人），女性（104人），男性（107人），飯舘村認知度が高い集団（飯舘村クイズが平均値以上の集団，105人），低い集団（117人）の5集団のスコア平均値は共通して，指標7，10，13，17が上位4位（より詳細には7か17が1-2位，10か13が3-4位）を，4，5が下位2位を占め，6が5-7位と上位に位置した．この結果からは農村に居住することと農業従事が関係しないように見られる．また利便性を非常に強くもとめていることがわかる．

(2) 因子分析の結果

全222人の集団では2因子構造が示された（**図-1**）．第一因子の固有値の総計は11.670，第二因子は1.581であり，第一因子が88.1%を占める．第一因子は，場は農村であるが，農村的生活ではない指標を農村居住の条件としている．特に，「6.農業以外の仕事ができる」が2番目にランクされていることが代表的であり，また都市部とのアクセスやインターネットの整備などが上位にランクされていることも目立っている．しかし，「6.農業以外の仕事につける」は第一因子，つまり利便性の一部としてとらえられており，その他の農業に関する指標「4．農業の仕事に就ける」，「5.趣味としての農業ができる」は第二因子，つまり農業や農村の多面的機能の一部としてとらえられている．これは農業の否定ではなく，「農村居住＝農業従事」と限定しない若者の感覚の表れであるといえる．個別ヒアリングによっても，栽培としての農業以外に生産物加工・販売など六次産業化の一部としての農業に強い興味をもっていることが明らかとなった．農村に住む＝農業をする，農業のみで生計をたてる，という考えに限定されないことが示されたといえる．「4.農業の仕事に就ける」，「5.趣味としての農業ができる」が，「15．自然環境が豊かである」と同じ因子に位置付けられていることからも，農村の落ち着いた環境を好ましく思い，農業・農村の多面的機能の評価の一部としてとらえていることが検証できる．農村では都市部よりも比較的安価に場が得られ，また広さの制約も少ないことに注目した結果ともといえる．さらには同じ因子にはいっている住民間のコミュニケーションや地域の特色についても，比較的自由に自分の望むことができるという考えにつながる．農業・農村の多面性・多様性を評価する因子が存在していることが明確である．一方，都市部へのアクセスやインターネットの整備を重視しかつ第一因子の因子負荷量が大きいことから，若者は農村居住の場合にも利便性を重視していることは明らかである．農村の多面的機能を活かしながら都市と同様の利便性も求めるという意識構造であるといえる．

		因子	
		1	2
10	都市部へのアクセスが良い	**.841**	.338
6	農業以外の仕事ができる	**.836**	.295
7	インターネットが整備されている	**.827**	.357
2	移住した時の補助金が出る	**.774**	.304
17	安心して暮らせる	**.766**	.491
12	友達と遊ぶ場所がある	**.710**	.243
8	徒歩圏内に商店がある	**.698**	.352
9	集まれる場所や機会がある	**.667**	.497
1	若い人（10代、20代）がいる。	**.650**	.528
13	子育てしやすい	**.626**	.544
16	地域活性化と自分がつながりやすい	.245	**.836**
19	環境負荷を減らす意識が高い	.377	**.712**
3	住民同士が親密である	.231	**.708**
11	地域の特色を活かした教育がある	.441	**.695**
18	居住している誇りをもてる	.469	**.654**
14	住民の活気にみちている	.593	**.641**
4	農業の仕事に就ける	.257	**.624**
5	趣味としての農業ができる	.255	**.594**
15	自然環境が豊かである	.394	**.561**

図-1 全222人に対する因子分析の結果

飯舘村認知度で集団をわけた場合とジェンダーにより集団をわけた場合の結果を図-2(a)(b)，図-3(a)(b)に示す．飯舘村クイズが平均点以上の場合と女性のみの場合，3因子構造となる．第一因子の内容は大きくは変わらず固有値の総計も高いが，前者では農業の仕事ができることや地域とのつながりが第二因子として独立し，後者では地域コミュニティや活気に関する項目が第二因子として独立する．今回アンケートを行った福島大学学生はいずれも第一因子が強く「農業以外の理由も農村居住を考える上で重要だ」という結果であるが，集団の違いによって，第二因子以降にみられる意識の違いがあり，農村居住や農業そのものを狭義な観点から否定しているのではなく，より多様な視点からとらえようとしていることがわかる．若者の農業に対する考えの表れともいえる．

	因子		
	1	2	3
10 都市部へのアクセスが良い	.774	.249	.273
6 農業以外の仕事ができる	.763	.240	.133
7 インターネットが整備されている	.742	.395	.231
8 徒歩圏内に商店がある	.727	.266	.131
17 安心して暮らせる	.711	.453	.262
13 子育てしやすい	.704	.303	.461
1 若い人（10代、20代）がいる	.587	.118	.470
2 移住した時の補助金が出る	.428	.171	.340
5 趣味としての農業ができる	.186	.769	.108
15 自然環境が豊かである	.338	.713	.358
19 環境負荷を減らす意識が高い	.392	.645	.277
4 農業の仕事に就ける	.118	.598	
14 住民の活気にみちている	.331	.555	.516
16 地域活性化と自分がつながりやすい	.264	.545	.459
11 地域の特色を活かした教育がある	.409	.503	.465
3 住民同士が親密である	.157	.386	.749
9 集まれる場所や機会がある	.474	.321	.586
18 居住している誇りをもてる	.223	.442	.550
12 友達と遊ぶ場所がある	.438	-.121	.461

図-2(a) 飯舘村クイズが平均点以上の集団

	因子	
	1	2
10 都市部へのアクセスが良い	.841	.338
6 農業以外の仕事ができる	.836	.295
7 インターネットが整備されている	.827	.357
2 移住した時の補助金が出る	.774	.304
17 安心して暮らせる	.766	.491
12 友達と遊ぶ場所がある	.710	.243
8 徒歩圏内に商店がある	.698	.352
9 集まれる場所や機会がある	.667	.497
1 若い人（10代、20代）がいる	.650	.528
13 子育てしやすい	.626	.544
16 地域活性化と自分がつながりやすい	.245	.836
19 環境負荷を減らす意識が高い	.377	.712
3 住民同士が親密である	.231	.708
11 地域の特色を活かした教育がある	.441	.695
18 居住している誇りをもてる	.469	.654
14 住民の活気にみちている	.593	.641
4 農業の仕事に就ける	.257	.624
5 趣味としての農業ができる	.255	.594
15 自然環境が豊かである	.394	.561

図-2(b) 飯舘村クイズが平均点以下の集団

」

	因子		
	1	2	3
6　農業以外の仕事ができる	.813	.133	.230
10 都市部へのアクセスが良い	.810	.263	.286
7　インターネットが整備されている	.801	.173	.459
17 安心して暮らせる	.723	.252	.534
8　徒歩圏内に商店がある	.690	.190	.159
13 子育てしやすい	.668	.496	.281
12 友達と遊ぶ場所がある	.626	.302	-.186
2　移住した時の補助金が出る	.607	.219	.207
1　若い人（10代、20代）がいる。	.600	.406	.140
9　集まれる場所や機会がある	.597	.586	.098
3　住民同士が親密である	.154	.698	.215
16 地域活性化と自分がつながりやすい	.177	.697	.450
18 居住している誇りをもてる	.412	.643	.319
14 住民の活気にみちている	.518	.603	.428
11 地域の特色を活かした教育がある	.412	.595	.354
5　趣味としての農業ができる	.143	.193	.707
4　農業の仕事に就ける	.087	.220	.613
19 環境負荷を減らす意識が高い	.373	.413	.555
15 自然環境が豊かである	.374	.470	.552

図-3(a)　女性の集団

	因子	
	1	2
10 都市部へのアクセスが良い	.827	.302
7　インターネットが整備されている	.812	.349
6　農業以外の仕事ができる	.757	.318
17 安心して暮らせる	.754	.481
8　徒歩圏内に商店がある	.704	.368
1　若い人（10代、20代）がいる。	.693	.460
13 子育てしやすい	.681	.488
2　移住した時の補助金が出る	.671	.271
12 友達と遊ぶ場所がある	.622	.254
9　集まれる場所や機会がある	.603	.579
19 環境負荷を減らす意識が高い	.357	.774
5　趣味としての農業ができる	.227	.736
3　住民同士が親密である	.325	.720
11 地域の特色を活かした教育がある	.433	.719
16 地域活性化と自分がつながりやすい	.363	.709
14 住民の活気にみちている	.469	.652
4　農業の仕事に就ける	.234	.641
15 自然環境が豊かである	.354	.629
18 居住している誇りをもてる	.357	.615

図-3(b)　男性の集団

4.　結論と今後の課題

福島大学生の農業や農村居住に関する考え方・意識構造の概要を示すことができた．より効率的に多面的機能に対する意識を拾い上げる指標リストへの改善が必要である．「6.農業以外の仕事につける」は，「農業に関係しながらも，栽培のみに規定されない仕事につける」という面と「農業と関係しない仕事につける」の2つにわけることが必要であったかもしれない．また，今回の指標リストには，農村での食の豊かさに関するものが含まれなかった．既報[1]では，若者が地域を訪れる際の一番大きなポイントは「食べ物」であることがわかっており，農村が食品の生産の場であることから食に関する指標が加わることで因子構造が変わった可能性があると考えている．なお，今後，都市部の学生など，今回のアンケート対象とは異なる性質の学生集団へのアンケートがまず求められる．また被災地での復旧・復

興活動に強く関わっている学生の意識構造にも違いがある可能性があり，アンケート調査が必要である．今後，指標の改善・改良と並行して母集団の違いに起因した意識構造の違いがあるかを検討することが必要である．本稿での結果は，福島大学生の「平均的な意識構造」を表したものと考えている．

謝辞：協働プロジェクトの推進はイノベ機構「復興知事業」による支援のもとで行われた．また本研究の実施においてはJSPS科研費21H0474300の支援を受けたことを記します．関係者および現地での協力者に感謝します．本稿で示した解析・考察の基礎は参考文献4に示した復興農学会大会，およびそれに先んじて行われた学内での報告会の準備にむけてメンバー全員により検討した結果にある．またアンケートの実施において，プロジェクト終了後も多大なご支援をいただいた，大和田諒さんに深甚なる謝意を示します．

REFERENCES

1) 原田茂樹，福島大学生・他団体への飯舘村訪問に関するアンケート調査結果：訪問のきっかけや訪問に必要な条件明確化のために，復興農学会誌，第3巻2号，pp.10-23，2023. [Harada, S.: Questionnaires for Fukushima university students and subjects belonging to other societies outside the university aiming to clarify the conditions and opportunities to visit Iitate-mura village, *Journal of Reconstruction Agriculture and Sciences*, Vol.3, Issue 2, pp.10-23, 2023.]
2) 原田茂樹，郷古雅春：農業水利システムを活かした森林からのセシウム含有懸濁物質流出抑制技術と社会との関わり：復興知集積をめざした考察，復興農学会誌，第1巻第1号，pp.1-11，2021. [Harada, S. and Goko, M.: Consideraion on cesium runoff reduction using existing stone weir for agricultural use as an example of social implementation of academic knowledge against nuclear plant accident damage, *Journal of Reconstruction Agriculture and Sciences*, Vol.1, Issue 1, pp.3-13, 2021.]
3) 原田茂樹，木村薫子：農村社会での多様なニーズとそれをくみ取る仕組みづくり，農業農村工学会誌（水土の知），第88巻第8号，pp.19-22，2020. [Harada, S. and Kimura, K.: Various needs in rural area planning and proposal of measures clarifying them, *Water, Land and Environ. Eng.*, Vol. 88, Issue 8, pp.19-22, 2020.]
4) 佐藤優花，原田茂樹，土屋七海，川又湧也，大和田諒，上椙航平，松島李奈，松本恵佑，渡辺優花：農村地域居住における若者の選好の調査解析，復興農学会2021年度　第1回 復興農学 研究会要旨集　食と農　復興の地の明日を求めて，pp.1，2022. [Sato, Y., Harada, S., Tsuchiya, N., Kawamata, Y., Owada, R., Uemuro, K., Matsushima, R., Matsumoto, K. and Watanabe. Y.: A study on the conditions and preferences of youth for selecting farm village as residential area, Proc., The 1st Annual Meeting of the Association of Resilience Agronomy: Research assembly of Resilience Agronomy for the Tommorow of Revitalizing Region, p.1, 2022.]
5） 大和田順子：関係人口と都市農村協力，2020年度（第69回）農業農村工学会大会講演会講演要旨集，pp.187-188, 2020. [Owada, J.: Possibility of the inter-regionally social capital, Proc. 2020 Annual Meeting Japan Society of Irrigation, Drainage and Rural Engineering, 2-49]
6) 図図倉庫：https://www.zuttosoko.com/（2023年8月20日最終閲覧）[ZUTTOSOKO: https://www.zuttosoko.com/ (Final Access 2023 Aug,.20)]

(Received June 19, 2023)
(Accepted August 21, 2023)

THE INDEX LISTING AND FACTOR ANALYSES FOR THE CONDITIONS NECESSARY FOR YOUTH TO REALIZE FARM VILLAGE RESIDENCE BASED ON THE QUESTIONNAIRE FOR THE FUKUSHIMA UNIVERSITY STUDENTS

Shigeki HARADA

The lack of farming successor is one of the biggest problems in the farm village areaarea. As a part of Fukushima University KYODO project, we performed brainstorming and fieldwork (at Iitate-mura) and made 19 index lists showing conditions and preferences of youth for selecting farm village as residential area. Via questionnaire done for Fukushima University students, evaluation of subjective importance of each index and resulting factor structure analyses were done. Together with the population of whole questionnaire respondent (n=222), four sub-populations considering the differences in gender and familiality with Iitate-mura were set. Seeing the significance of the 19 indices simply, agriculture and the farm village residence do not seem to have linkage in the consciousness structure of the youth. However, the factor analyses revealed that the youth does not regard a farm village only as a place for cultivation a farm village and catches a purpose of living versatilely. These results together with the questionare for the other populations are expected to contribute to the planning of farm village area activation.